

インド視察報告書

沖縄経済同友会

2025年2月

主催：国際委員会

目次

I.視察団名簿.....	2
II.視察日程表《2025年2月19日（水）～2月23日（日）》.....	3
III.インド視察（総括）.....	4
垣花 秀毅 国際委員会委員長（㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
IV.アグラ視察.....	9
中根 雅典（日本航空㈱ 沖縄支店 支店長）	
V.アミティ大学ノイダ校訪問.....	13
白井 隆秀（インタラクティブ㈱ 代表取締役）	
VI.JETRO ニューデリー事務所訪問.....	16
崎山 泰美（㈱沖縄銀行 常務取締役）	
VII.在インド日本国大使館訪問.....	20
島袋 清人（㈱沖電工 代表取締役社長）	
VIII.インド日本商工会との夕食交流会.....	23
仲宗根 斉（沖電企業㈱ 代表取締役社長）	
IX.NURA（ニューラ）視察.....	25
鈴木 康友（㈱ジーセットメディカル 代表取締役社長）	

I. 視察団名簿

No	当会役職	氏名	会社名	役職
1	代表幹事	ふちべ みき 渕辺 美紀	株式会社ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	もとなが ひろゆき 本永 浩之	沖縄電力株式会社	代表取締役社長 社長執行役員
3	特別幹事	かわかみ やすし 川上 康	株式会社琉球銀行	代表取締役会長
4	副代表幹事	とうめ はるお 當銘 春夫	株式会社りゆうせき	代表取締役会長
5	国際委員長	かきはな ひでき 垣花 秀毅	株式会社おきぎん経済研究所	代表取締役社長
6	基地・安全保障委員長	いでむら いくお 出村 郁雄	那覇空港貨物ターミナル株式会社	代表取締役社長
7	観光委員長	きくざと しのが 喜久里 忍	琉球セメント株式会社	代表取締役社長
8	組織拡大・交流委員長	こばやし ふみひこ 小林 文彦	川崎重工業株式会社 沖縄支社	上席主幹
9	常任幹事	しまぶくろ きよひと 島袋 清人	株式会社沖電工	代表取締役社長
10	常任幹事	なかそね ひとし 仲宗根 斉	沖電企業株式会社	代表取締役社長
11	正会員	うすい たかひで 白井 隆秀	インタラクティブ株式会社	代表取締役
12	正会員	きみやま やすみ 崎山 泰美	株式会社沖縄銀行	常務取締役
13	正会員	すずき やすとも 鈴木 康友	株式会社ジーセットメディカル	代表取締役社長
14	正会員	なかね まきのり 中根 雅典	日本航空株式会社 沖縄支店	支店長
15	事務局長	しまだ たかあき 島田 尚昭	沖縄経済同友会	事務局長
16	事務局研究員	あらかき のぶあき 新垣 誠朗	沖縄経済同友会	事務局研究員

II. 視察行程表

月日	都 市	現地時間	交通機関	行 程	食事
2/19 (水)	那覇空港 那覇空港 発 羽田空港 着 羽田空港 発 デリー空港 着	05:45～ 07:35 09:45 11:45 18:20	JL900 JL039 専用車	那覇空港国内線ターミナル3階集合 空路にて羽田空港へ 羽田着後、羽田空港国際線ターミナルへ移動 空路にてデリーへ ※所要時間:10時間5分 デリー着後、入国審査、荷物受取、通関手続 現地ガイドと合流 ホテルへ移動 夕食 【デリー泊】	× 機 夕
2/20 (木)	デリー滞在 デリー発 アグラ着 アグラ発 デリー着	06:30頃 14:30頃	専用車 専用車	■ホテルにて朝食(※BOX朝食になる場合もございます) 陸路にてアグラへ ・世界遺産タージマハール 市内レストランにて昼食 ・『赤い城』と呼ばれるアグラ城 陸路にてデリーへ 市内レストラン又はホテルにて夕食 宿泊ホテル着 【デリー泊】	朝 昼 夕
2/21 (金)	デリー滞在	08:00 09:30～ 11:00 12:30～ 14:00 15:00～ 16:00 18:30頃	専用車	■ホテルにて朝食 ◎現地大学訪問(アミティ大学) ～インドにおける高度人材育成の取組みについて～ ◎JETROニューデリー事務所訪問(※ランチBOX) ～インドの経済動向(観光)に関するブリーフィング～ ◎在インド日本国大使館訪問(※冲印友好協会と合同) ～表敬訪問ならびに意見交換～ ◎インド日本商工会(JCCII)との夕食交流会 宿泊ホテル着 【デリー泊】	朝 昼 夕
2/22 (土)	デリー滞在 デリー空港発	07:50 09:00～ 10:00 午後 16:00頃 19:55	専用車 JL030	■ホテルにて朝食 ◎NURA(ニューラ)視察 ～富士フイルムがインド国内で展開する最先端機器や 人工知能(AI)技術を活用した検診センターについて～ ◎グルガオン視察 市内レストランにて昼食 昼食後、デリー空港へ デリー空港着、チェックイン(搭乗・出国続き) 空路にて羽田空港へ ※所要時間:7時間5分 【機内泊】	朝 昼 機
2/23 (日)	羽田空港 着 羽田空港 発 那覇空港 着	06:30 08:05 11:05	JL905	羽田着後、入国手続、荷物受取、通関手続 羽田空港国内線ターミナルへ移動 空路にて那覇空港へ 到着後、解散	機

III. インド視察（総括）

【報告者：垣花 秀毅（国際委員長：株式会社おきぎん経済研究所 代表取締役社長）】

SUMMARY -要約-

沖縄経済同友会視察団 16 名は 2025 年 2 月 19 日（水）～23 日（日）の日程でインド視察を実施した。2023 年の国連推計で中国を抜き去って人口世界一となり、2024 年の GDP ランキングでも日本に迫る世界第 5 位につけるライジングな国を自分達の目で確かめることが目的である。

初日は早朝 5：45 に那覇空港に集合し、羽田空港から約 10 時間のフライトでインドへ。デリー市内のホテルへの到着は現地時間の 20 時頃（時差：日本より 3 時間半遅れ）。同じアジアといっても移動には相応の時間を要する。

2 日目は、タージマハールおよびアグラ城の視察。約 400 年前に作られた建造物の美しさと大きさ、そして観光客の数に驚いた。

3 日目のアミティ大学では副学長を筆頭に多くの教授やスタッフより説明を受けた。国内のみならず海外にも 12 のキャンパスを展開する資金力や、多くの分野で産学連携の実績を出していることは、OIST 発展に向けた提言に取り組む我々にも刺激になるものであった。続いて JETRO ニューデリー事務所でランチミーティング、在インド日本国大使館への表敬訪問ならびに意見交換、インド日本商工会との夕食交流会で、現地の日本人から生の声を聴くことができ、中身の濃い一日であった。

4 日目は、富士フィルムが展開する検診施設 NURA（ニューラ）の見学。予防医療という概念が浸透していない土地での事業展開であるが、増加するアッパーミドル層のニーズを捉え、順調に拡大しているという。午後はヒンドゥー寺院の見学や地元スーパーで現地の物価事情を見るなどして帰国の途に就いた。

5 日目の朝は羽田行きの飛行機内で迎えたが、ちょうど到着時間が日本の朝にあたり、快適な目覚め。初日は移動日、最終日は機内泊という弾丸ツアーであったが、非常に充実した内容であった。



（那覇空港ラウンジでの出発式）⇒ （デリーの空港での解団式での充実した表情）

TOPICS -印象に残ったこと-

ここでは、視察の合間のエピソードや現地で見聞したトピックスを記載する。視察内容の詳細については、参加者による個別レポートをご参照いただきたい。

EPISODE 1 瀧辺代表の撮影会（？）

タージマホール視察中に瀧辺代表が地元の方に「一緒に写真撮っていいですか？」と頼まれることが何回かあった。現地ガイドのクマールさんも「地方の住民には、外国人と一緒に写真を撮ることがカッコいいという感覚があるが、ここまで何回も声をかけられるのは珍しい。」と驚きを隠せない様子であった。



（サリーを着た女性との撮影に応じる瀧辺代表）

EPISODE 2 昨年の国際委員会講師の柴田氏と再会

2024年8月の第2回国際委員会で講師を務めていただいた柴田洋佐氏（EIJ株式会社 代表取締役社長）に大学や企業先訪問のコーディネートをお願いし、アテンドしていただいた。10年以上前にインドに移住してビジネスを行っている柴田氏の解説で現地事情の理解が深まった。



（ホテルロビーで柴田氏（写真右端）と再会）

EPISODE 3 施設に入るたびに手荷物検査

観光施設やホテル、商業施設等に入るたびに手荷物検査を受ける。近隣諸国との紛争や宗教対立によるテロ事件が発生した過去や世界遺産の保護を考えると必要性は理解できるが、タージマハールでは長蛇の列となり、検査時に荷物の一部を没収された参加者もいた。また、自分たちの宿泊しているホテルにも毎回チェックされるのは、なかなか面倒であった。



(タージマハールで手荷物検査の列に並ぶ当会視察団一行)

EPISODE 4 渋滞、クラクション … インドの交通事情

デリーなどの都市部では交通渋滞が日常化している。しかも、隙間があれば、オートリクシャという小型3輪のタクシーやバイクが入ってくるので、3車線に対して5列くらいで走行しているように見受けられた。車線変更や割り込みのためにクラクションの音が途切れないが、不思議と殺気立っている様子は無い。



(バスの車窓よりオートリクシャとバイク)



(何人載っているのか数えきれない)

EPISODE5 街中に野良牛？ … 実は飼牛らしい

移動中の車窓から牛を見かけて「これが噂の野良牛か！」と写真を撮っていたが、柴田氏によると、この牛たちにはちゃんと飼い主がいて夜になると家に帰っていくらしい。インドで多数を占めるヒन्दゥー教徒は牛を大切にするため、天寿を全うする牛も多いという。



(街に牛がいても誰も気にしない)

EPISODE6 どこかで見た光景 … 市場のお肉屋さん

現地の市場調査も兼ねて立ち寄ったマーケット（市場）で見たのは、那覇市公設市場を思い出させるお肉屋さんの光景。店頭に吊るされた鶏肉とその地面で飼われているニワトリが印象的であった。



(ニワトリが逃げないのが不思議)

EPISODE7 近代都市グルグラム（グルガオン）

4日目の視察先 NURA の所在地はデリー近郊のグルグラムである。2016年に現在の名称となったが旧名のグルガオンで呼ぶ人も多い。IT産業を中心に急速に発展した都市で、外資系の近代的なビルやマンションが立ち並び、IT大国となったインドを象徴する街となっている。



（都市開発を主導した地元不動産大手 DLF 社のビルが多く立ち並ぶ）

ACKNOWLEDGEMENTS -謝辞-

参加者の多くが「インドはずっと行きたかったが、今回は初めてだ」と語っていた。私自身がインドに関心を持ちながら、「お腹を壊す」「治安が悪い」というイメージもあって行ったことが無かった。そんなインドを沖縄経済同友会の心強い仲間たちと一緒に訪問し、会員同士の交流を深めながら見聞できたことは、素晴らしい体験であった。

最後に、これほどの充実したスケジュールを練り上げ着実に実行した当会事務局、どんな場面でも臨機応変に対応してくれた近畿日本ツーリスト添乗員の天倉さん、そして数々のサポートを頂いた日本航空グループの皆様感謝を捧げたい。

以上

IV.アグラ視察

【報告者：中根 雅典（日本航空株式会社 沖縄支店長）】

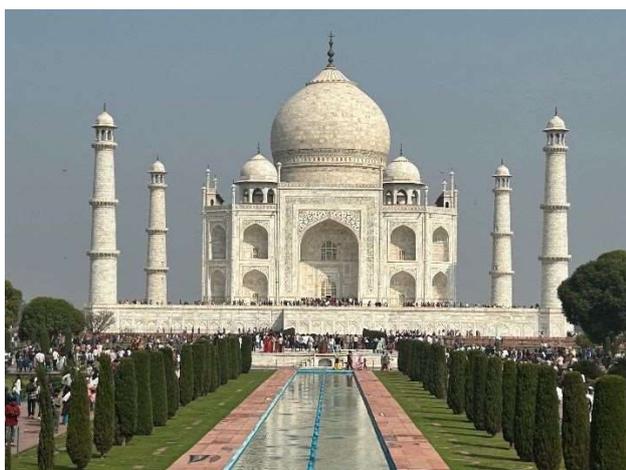
1. アグラについて

アグラ市は、インド北部のウッタル・プラデーシュ州に位置する歴史的な都市であり、「愛の街」とも呼ばれている。ヤムナー川のほとりに広がり、ムガル帝国時代には首都として栄えた。インドの首都デリーから南東約 200 キロメートルに位置し、デリーからアグラまでは鉄道や車でのアクセスが可能であり、今回は大型バスに乗り高速道路を利用し、途中休憩を取りながら片道約 4 時間をかけて訪問した。

2. タージ・マハル視察

(1) 概要

タージ・マハルは、アグラ市に位置しヤムナー川の岸に建てられている。17 世紀に建設され、現在でも世界中から訪れる観光客を魅了している。霊廟は中央ドームと四隅に配置されたミナレット（塔）からなるシンメトリーな配置がその特徴。ドームの高さは約 73 メートルで、内部にはムムターズ・マハルとシャー・ジャハーンの霊廟が安置されている。タージ・マハルは、インド・イスラム建築の至宝として高く評価され、その美しさと建築技術で名高い建物である。



(2) 愛妻のために作られた美しいお墓

1631 年に、シャー・ジャハーン的最愛の妻であるムムターズ・マハルが 14 番目の子供を出産中に亡くなった。彼は彼女のために壮大な霊廟を建てることを決心した。建設プロジェクトには、ペルシャ、トルコ、そしてインドから集まった約 2 万人の職人と 1,000 頭の象が動員され、主要な建材である白大理石は約 300 キロメートル離れたラジャスターン州から運ばれた。ドームが完成し、最終的に 22 年の歳月をかけ 1653 年に建設が終了した。

シャー・ジャハーンは、自身の霊廟としてタージ・マハルの向かい側に黒い大理石を用いた第二の霊廟を建築する計画を持っていたが、その計画が実現することはなかった。彼の息子であるアウラングゼーブが権力を掌握し、その後シャー・ジャハーンをアグラ城に幽閉した。シャー・ジャハーンは幽閉された後も亡くなるまでタージ・マハルを眺め続け、その後ムムターズ・マハルの隣に埋葬された。

(3) 建築学的・文化的価値

タージ・マハルは、建築的にも美術的にも非常に価値の高い建物である。主な建材は白大理石で、これは約300キロメートル離れたラジャスタン州から運ばれた。建物は左右対称な絶景美もさることながら、内部の装飾には、ラピスラズリ、カーネリアン、トルコ石などの貴石が多用され、象眼※細工として施されている。壁面には、クルアーンの詩がアラビア書道で彫刻され、宗教的な敬虔さを感じさせる。また、花状の象眼細工や彫刻が美しい模様を形成している。イスラム教徒の祈りの場であるミヒラーブやミナレットも含むこの霊廟は、宗教的儀式にも用いられている。また敷地には、ペルシャ様式の四分庭園が広がっている。庭園は十字形の道によって四分割されており、中央には大きな反射池がある。この池にはタージ・マハルが美しく映り込み、その美しさをさらに引き立てる役割を果たしている。庭園と水の要素は、イスラム建築の伝統的な要素であり、楽園の象徴としての役割を果たしている。

1983年、タージ・マハルはユネスコの世界遺産に登録された。世界遺産登録の理由として、ユネスコはタージ・マハルを「イスラム建築の傑作」と称賛、その卓越した建築美と歴史的価値が挙げられる。世界遺産としての登録は、タージ・マハルの国際的な認知度を高め、観光名所としての地位を確立するとともにインド経済に貢献する重要な観光資源ともなっている。

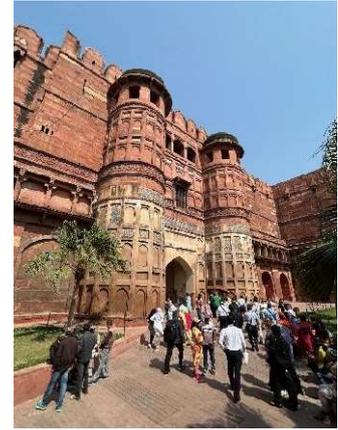
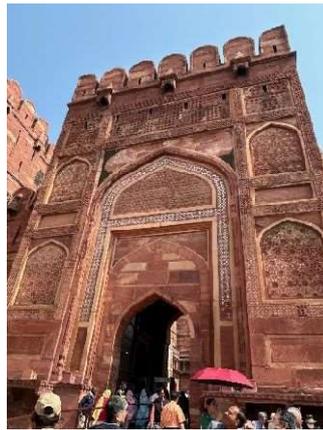
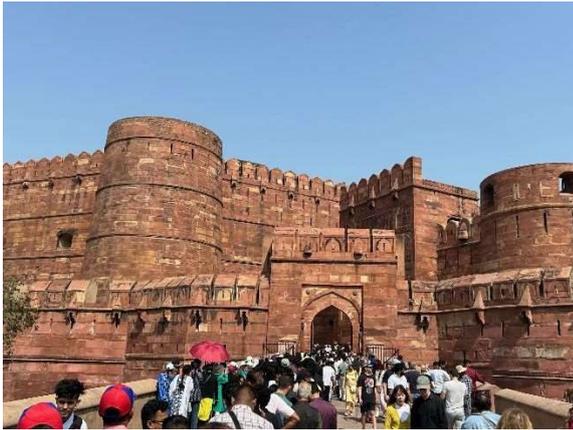


3. アグラ城塞視察

(1) 概要

アグラ城塞は、アグラ市に位置する壮大な城塞である。タージ・マハルから約2kmの場所に位置し、かつてのムガル帝国の中心地として機能していた。城塞は面積約94ヘクタールにわたり、その形状は半円形で、全周約2.5キロメートルに渡って赤砂岩の城壁が続く。この頑丈な城壁は高さ約21メートルに及び、内部には多くの宮殿やモスク、庭園が点在している。アグラ城塞は、その壮大さと美しさにより、1983年にタージ・マハルと同じくユネスコの世界遺産に登録されている。

※象眼・・・象嵌（象眼）は、工芸技法のひとつ。象は「かたどる」、嵌は「はめる」という意味で、一つの素材に異質の素材を嵌め込む技法。

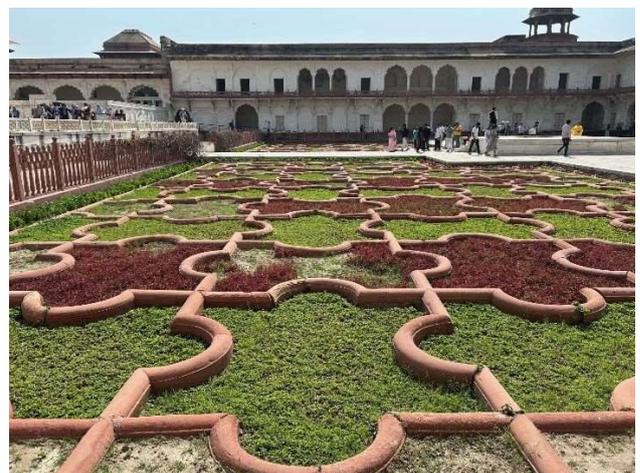


(2) 歴史について

アグラ城塞の歴史は16世紀に遡る。建設は、ムガル帝国の第3代皇帝アクバルの命により1565年に開始された。アクバルは、デリーからアグラに遷都し、ここを帝国の新たな首都とした。城塞の建設には、赤砂岩が多用され、数万人の労働者が約8年かけて完成させた。

アクバルの後継者であるジャハーンギールとさらにシャー・ジャハーンの治療において、城塞内には白大理石を用いた宮殿やモスクが多数建設された。特に、シャー・ジャハーンが建設したムスンマン・ブルジュ（八角形の塔）は、後に彼が幽閉された場所としても知られている。

アグラ城塞は、ムガル帝国の重要な行政および軍事拠点として機能し、その後の時代にも多くの歴史的出来事の舞台となった。特に、城塞内のディワニ・アーム（一般謁見の間）やディワニ・カース（特別謁見の間）などは、権力の象徴として豪華さを誇っている。アグラ城塞はムガル帝国の栄華と落日を物語る重要な歴史的建造物である。



4. 所感

今回の視察では、タージ・マハルとアグラ城塞の2つの世界遺産に触れる機会を得た。タージ・マハルは、その壮大さと美しさに圧倒された。大理石の彫刻や象眼細工の繊細さは、当時の職人たちの素晴らしい技術力と芸術性を証明している。敷地全体が綿密に計画され、美しい庭園や反射池が霊廟を一層引き立てている。この視察を通じて、霊廟の美しさとその背景にある皇帝の愛の物語、また文化的価値にも触れ

ることができ、毎年数百万人のインド国民が訪れるというタージ・マハルがなぜこれほどまでに愛され続けるのか、その理由を実感することができた。

アグラ城塞もまた、非常に印象的な遺産であった。赤砂岩の城壁や堀に囲まれたこの巨大な城塞は、ムガル帝国の権威と繁栄を象徴している。内部には、美しい庭園や多くの宮殿、モスクが存在し、その豪華さと精緻な装飾に目を見張った。シャー・ジャハーンが幽閉されていた部屋からはタージ・マハルを見渡すことができ、歴史の悲哀を感じさせられる場面であった。

タージ・マハルとアグラ城塞の二つの世界遺産は、それぞれに独自の魅力と歴史的価値を持ち、インド文化の多様性と深さを感じさせてくれた。今回の視察により、ムガル帝国時代の歴史と文化について深い理解を得ることができ大変貴重な経験となった。

V. アミティ大学～インドにおける高度人材育成の取組みについて～

【報告者：白井 隆秀（インタラクティブ㈱ 代表取締役）】

インド視察 3 日目、デリーから 1 時間弱の車移動を経て、インド・ノイダに位置するアミティ大学を訪問した。今回の視察の主目的はインドにおける高度人材育成（特に IT 分野）の取組みについて知見を得ることだったが、アミティ大学は沖縄県とインドの学術・産業分野の連携可能性を模索する目的を有しており、多様な文化や経済背景を持つインドの大学がどのような教育・研究体制を整え、地域社会とどのように協働しているのかを直接確認する貴重な体験となった。

視察スケジュールは主に、アミティ大学関係者との意見交換、研究施設や学内のツアーの 2 つの柱で構成された。

大学関係者との意見交換



事前の資料でアミティ大学の概要は下記の通り共有されていた。

- ・アミティ大学はインドで有数の研究とイノベーションをおこなう非営利私立大学。
- ・6,000 件以上の研究論文を有し、これまでに 794 件の特許を出願している。
- ・学生の総合的な教育を理念とし、一般教養のほかに外国語、行動科学、企業コミュニケーション、軍事訓練の教育も行っている。
- ・大学助成委員会によって承認され、NAAC によってグレード「A+」で認定されている。
- ・学部や大学院、博士レベルの研究の多くの分野でキャンパスと遠隔モードを通じてプログラムを提供している。
- ・インド国内のほか、ロンドン、ドバイ、シンガポール、ニューヨークに海外支部キャンパスがある。

意見交換会では実際に大学関係者の皆さまにアミティ大学のご紹介を頂くことで、豊富なコース編成やカリキュラムの柔軟性についても理解を深めることができた。多くの学部で複数専攻を横断的に履修できるシステムが導入されており、学際的な知識を身につけやすいとのことである。特にビジネスマネジメントと IT を組み合わせる専攻や、バイオサイエンスと環境学を融合させる学位プログラムなど、時代のニーズに合った学習環境が整っている印象を受けた。

在學生との意見交換会では、彼らの学習や研究に取り組む姿勢の高さに感銘を受けた。インドという国のエネルギーな雰囲気と、学生たちの旺盛な探究心が相まって、新たなアイデアや事業プランを次々と生み出す土壌が出来上がっているのだと実感した。さらには大学側がアントレプレナーシップを支援するためのプログラムを複数用意し、起業を志す学生に対し、資金調達やビジネスモデル構築のノウハウを提供しているとのことだった。

教職員との懇談では、アミティ大学が海外の大学と積極的にパートナーシップを結び、交換留学や研究者の派遣を推進しているという話を聞いた。日本の大学との連携事例も既に存在し、語学や文化交流を中心としたプログラムも進行中だそうである。沖縄の大学や企業とも連携を深め、観光・リゾート産業や健康長寿研究といった沖縄の強みを活かしたプロジェクトを展開していく可能性があると感じた。さらに、アミティ大学が持つ研究力とグローバルなネットワークが、沖縄の地域経済を活性化するうえでも大きな力になり得るのではないかという期待が膨らんだ。

研究施設や学内のツアー



学内ツアーでは、施設が最新の ICT インフラを備えているだけでなく、キャンパス全体が国際的な雰囲気に包まれている点が印象的だった。AI ラボやドローンの実験室をはじめとする多彩な分野の研究室を見学し、学生たちの意欲的な実験風景や現地企業との共同開発に関する資料などを拝見した。

IT の分野において、インドは米国のシリコンバレーと表裏一体とも言える存在で、インド出身のエンジニアがシリコンバレーにおいても沢山活躍している。また地球の反対側に位置するため、シリコンバレーが夜の間インドで開発が進められる。そのため開発をインドで行っているシリコンバレーのスタートアップも多い。これらのことからインドの IT のレベルは高く AI 研究においても、インド自体が時代の先端を走っている印象を受けた。

また自動車の整備を教える部屋では、タタ・モーターズが全面的に支援して、技能を教えるための機材やノウハウの提供を行っていたのが印象的であった。自動車整備のエンジニアは日本でも人材不足が著しい職種の一つであり、アミティ大学で学んだ生徒は日本の人手不足を解消する一手になると感じた。

インドと沖縄・日本をつなぐ未来へ



今回の視察を通じて得た最大の収穫は、インドの高等教育機関が世界的な視野をもって社会課題に取り組んでいる点を直接肌で感じられたことである。アミティ大学の教育方針は理論と実践をバランスよく両立させることを重視しており、その成果は学生や研究者の積極的な活動に表れていた。また、多様な学生や教員が同じキャンパスで切磋琢磨する環境は、国際ビジネスや観光を重要産業とする沖縄にとっても刺激的なモデルとなるだろう。

加えて今回のインド視察全体を通じて深めた知見は、沖縄のみならず日本全体にとっても有益な示唆を与えるものであると考えている。今後、沖縄経済同友会の活動のなかで、本視察を通じて得られた情報や人脈を活用し、産学連携や学生交流プログラムの具体案を検討していけるのではないだろうか。

インドと沖縄、それぞれが持つ強みを掛け合わせることで新たなビジネスチャンスや学問分野の発展が見込めるため、一過性の交流にとどまらず、継続的かつ相互補完的な関係を構築することが求められる。今回の経験を活かし、両地域の持続的な発展に向けて、有意義な連携が実現することを期待している。

VI. JETRO ニューデリー事務所

【報告者：崎山 泰美（株式会社沖縄銀行 常務取締役）】

1. JETRO ニューデリー事務所の概況

JETRO ニューデリー事務所は、日本とインドの間の貿易および投資を促進するべく①**ビジネス支援**：日本企業がインド市場に進出する際のサポート。法務・労務・税務・会計に関する無料相談や、インド政府への新規投資・拡張に関する無料相談等。②**市場情報の提供**：インド市場に関する最新情報やビジネスチャンスを提供し、日本企業がインドで成功するための情報基盤の整備。③**イベントの開催**：ビジネスマッチングイベントやセミナーを開催し、日本とインドの企業間のネットワーキングを促進。④**知的財産の保護**：知的財産に関する情報提供や相談を通じて、日本企業の知的財産権保護等の活動を行っている。

上記の活動内容は、JETRO の各拠点共通事項ではあるが、インドの場合は、（後述する）国内産業保護のため、頻繁に税制や手続きが変更になることから、特に税務、会計に関する相談が多いとのこと。

2. ブリーフィング内容

本セッションでは、時間の都合上、昼食を摂りながら日系企業の動向とインドにおける訪日旅行の現況という2つのテーマでのブリーフィングがなされた。

(1) インド概況と日系企業動向についての説明

前半は、インドの基礎情報に関する説明、後半は日系企業の動きなどの説明。

- ① 人口は2024年7月現在、14.5億人。2023年に人口は世界一となる。現在第2位は中国の14.2億人だが年齢中央値がインド28.4歳に対し、中国は少子高齢化が進み39.6歳(因みに日本は47歳!)。2050年までは人口ボーナス期が続く見込み。
- ② 2000年、GDP世界第13位だったインドは2024年予測値で3位ドイツ、4位日本に次いで第5位になる見込み。2029年予測では米・中に次ぐ3位に躍進する見込み。
特に2020年はコロナ禍でGDP成長率は41年ぶりにマイナス5.8%まで落ち込むものの、2021年は9.7%増とV字回復、その後も6-7%の高成長が予測されている(IMF予測値)。
- ③ 一方、平均所得水準は2,390ドルで低所得国のカテゴリーに留まっており、1970年代初頭の日本と同程度。
(参考：フィリピン3,950ドル、タイ7,230ドル、中国12,850ドル、日本42,550ドル)
- ④ しかし、上記の数値は1人あたりの所得への割り戻しのため、人口が多い国は相対的に低くなる。インドでは2010年、年間5,000ドルの低所得者層が59.8%と6割を占めていたが、2020年には43.1%まで減少。年収15,000ドル以上の富裕層・上位中間層も2020年9.6%から2040年には72.3%までの拡大が見込まれている。
- ⑤ こうした成長を支えたのが2014年に誕生したモディ政権による改革。具体的には2016年高額紙幣の廃止と流通の即時禁止によりブラックマネー撲滅とデジタル経済への移行促進。物品・サービス税(GST)導入による全国一律の物品・サービス税に統合したことによる税収増。特にGSTは5段階あり、生活必需品は0%だが、ぜいたく度が上がるにつれ5%、12%、18%、28%となり、貧困層の税負担を考慮しつつ、税収増を実現させている。

また「メイク・イン・インド」の旗印の下、豊富な若年労働力を製造業に従事させることで所

得水準の向上を図るとともに、インド標準規格強制認証（BIS）品目拡大などの非関税障壁を設けることで輸入を抑制する一方、国内への投資する製造業に対しては多額の補助金を出し、進出を促している。

（参考：上記補助金を受けている日本企業は現在 29 社）

- ⑥ 以上の状況から日本からの対内直接投資は順調に推移。2010 年 725 社、1236 拠点だった日系企業数は 2022 年 1400 社、4901 拠点まで拡大。2024 年の営業利益見込みを「黒字」とした在インド日系企業の割合は 77%、同じく今後 1～2 年の事業展開の方向性について「拡大」とした日系企業の割合は 80.3%。中間製造拠点ではなく、インド国内向けの市場開拓に力を入れる企業が多い。
- ⑦ 一方、ビジネス上のリスクとしては「税制・税務手続きの煩雑さ」が 63.0%で 1 位。以下「人件費の高騰」「行政手続きの煩雑さ（許認可等）」があり、この点注意が必要。

《質疑応答》

Q：米中対立の中で、インドはどのような動きをしているのか？

A：インドは昔から独自路線。どちらか一方につくという行動は取らない。クワッドに入っているが、兵器はロシア製など。その点、今の米中対立はインドにとってはある意味チャンスと捉えていると考える。

Q：インドはまだインフラが未整備で、投資環境としてはタイやベトナムに劣るのでは？

A：タイやベトナムでは、そこで生産したものを先進国等に輸出する輸出志向型の手法。インドに来る企業は、インドの労働力で生産したものでインド内需を取り込む戦略をとっており、タイやベトナムとは異なる投資行動となっている。

Q：税制上のリスクとしてはどんな点があるのか？

A：制度としてはある程度透明だが、インド税務当局の徴税姿勢はかなり積極的である。企業による納税実績に何かしらの瑕疵があると当局に判断された場合、（資金力のある）外資系企業でもその対応に苦慮することが珍しくないと言われている。

（2）インド市場における訪日旅行の現況

（※本ブリーフィングは時間が押してしまい、10 分程度となる）

- ① インドの訪日旅行市場は 2013 年 75,000 人から 2024 年 233,000 人で過去最高。旅行先 TOP 5 は UAE、サウジ、米国、タイ、シンガポールの順であるが、UAE、サウジは出稼ぎ目的であるため実質の観光旅行先は米国からとなり、日本は新しい旅行先としての位置づけ。
- ② 訪日旅行では東京～箱根～富士山。京都～大阪+広島のいわゆるゴールデンルートパッケージツアーで 7～8 泊、45 万円前後で回るのが主流。
- ③ 上記ゴールデンルート以外は北海道が徐々に浸透しつつあるものの、沖縄への関心は薄い。理由はインドからはタイ、モルディブなどの世界的なビーチリゾートが近くにあり、沖縄のいちばんのコンテンツである「青い梅、青い空」が通用しない。

《質疑応答》

Q：そもそもインドの旅行客で、ビーチリゾートに行くのは一般的か？

A：一般的ではある。但し特徴としては、インドでは親族みんなで行って、1 週間ほどのんびり

り滞在するとか、ハネムーンで行く形が多い。

Q:これからインドでは富裕層の割合が多くなるとの予測があり、沖縄としては(旅行費用45万円ではなく)もっと上の富裕層を呼び込みたいところ。この点で工夫なりアドバイスはないか?

A:実はインドの富裕層でも、さらに3段階あり、超富裕層へは接触そのものがまず難しい。狙うとすれば、アッパーミドル層になるが、インドで最も効果的なのは、実は「口コミ」。隣の、あるいは友人が(沖縄に)行ってみてよかったという話があれば、「じゃあ私も」となることが多い。よって、戦略としては、アッパーミドル層に人気のインフルエンサーとか、アッパーミドル層がよく使う旅行会社を招いてのプロモーション等が有効と思われる。

3. 所 感

説明を聴いていて、やはりインド躍進には多少強引な政策の推進が必要なのだと感じた。それはモディ政権以前のインドの経済状況と、モディ政権誕生の2016年以後の各種数値を比較すれば明らかであり、この点、本レポートではあえて比較する数値を多く用いた。

一方、やはり人口の多さと貧富の格差の大きさが、この国のメリットであり、デメリットとも感じた。たしかに14.5億人は市場としてみれば有望かもしれない。しかし(1)-(3)で触れたように、平均所得水準2,390ドルはバングラディッシュより劣っており、これだけの人口を抱える国で成長の果実を低所得者層まで広げ、これらの人々が中間層(年間15,000ドル程度)として内需拡大に貢献できるようになるには、まだまだ時間がかかると思われる。この点、まさにインドは「なりふり構わず」貧困層の引き上げと産業の高度化(製造業へのシフト)の両立を目指して奮闘している状況であり、インドに進出して内需取り込みに成功したスズキのようになるには、こうした点を理解して、我慢強く、かなり長いスパンで進出する覚悟が必要と感じた次第である。



VII. 在インド日本国大使館

【報告者：島袋清人((株)沖電工代表取締役社長)】

日 時：2025 年 2 月 21 日(金) 15:00～16:00

場 所：在インド日本国大使館会議室

応対者：有吉次席公使、津森参事官、横手参事官、萩原書記官

(概要)

在インド日本国大使館を表敬訪問し、訪印の目的や視察概要を報告するとともに、インド経済や日本国、特に沖縄との係り方等について意見交換を行った。同時期に沖縄より訪印していた沖印友好協会との合同表敬。

(議事)；進行役横手参事官

1. 開会のあいさつ・・・長浜善巳 恩納村長 (沖印友好協会)

長浜村長から大使館対応へのお礼の挨拶と、沖縄の現況について特に観光はコロナ禍以前に戻りつつあり、地元である恩納村も活況を呈しているところ。また OIST もあり学術面でも各国との交流があり、今後特にインドとの交流が深まることを期待している。

2. 沖印友好協会会長あいさつ・・・富川盛武 沖印友好協会会長

沖印友好協会の富川会長から IT を通しての日印友好親善やインドの底力に期待していること、沖縄はコストコも進出し、観光業も活況でインドからの人の交流が活発化することを望む旨の挨拶があった。

3. 沖縄経済同友会代表幹事あいさつ・・・淵辺代表幹事

淵辺代表幹事から訪印の目的およびアミティ大学、JETRO ニューデリー事務所訪問等の視察概要の報告と、沖縄における OIST (沖縄科学技術大学院大学) の意義、また GW2050PROJECTS*が始まり、今後も大きく発展する地域であることなどの話があった。

4. 大使館あいさつ・・・有吉次席公使

有吉次席公使からインドの経済状況について、GDP が年率 7～8%成長していること、今後は ASEAN 10 カ国、さらには日本やドイツを追い抜いていくであろうこと、また市場としてのインドの可能性、および日本への人材の送り込みという面では IT などの所謂高度人材、介護や技能実習生といった労働力としての人材など様々な分野に対応可能である旨の話があった。

5. 意見交換 (大；大使館、経；沖縄経済同友会、友；沖印友好協会)

Q 経) インドの IT/AI 人材をどの様にすれば日本へ送り込めるか。言語 (英語) の問題など欧米諸国に比べてマイナスの面を如何にすれば克服出来るか。文科省が次年度からインド人留学生へ 300 万円の補助を出すという話もあるが、我々が何をすべきかも含めてご意見を伺いたい。

A 大) インドからの留学先は日本へ 1,600 人程。アメリカ・カナダが多くてそれぞれ 25 万人 (アメリカ)、18 万人 (カナダ) 程度。オーストラリアが 10 万人程と英語圏が圧倒的に多いが、ドイツでも 3 万 5 千人ということからしても日本に留学する学生数は極端に少なく、順位でいうと 35 番目である。大使館としても日本語学習生を増やすなどの取り組みを行っているが、インド人は日本での成功ストーリーを描きにくいと考えている。SNS 等での積極的な発信が必要。入口はアニメでも日本

食でも構わないので日本を好きになってもらうことが大事。

A 大) 日本の受入側について、日本語が出来ないとダメみたいなどころがあるが、昨今は翻訳ソフトも充実しており、また日本に来てから日本語を覚えてもらうなど、まずは日本へ行くことのハードルを如何に下げるかが重要。

Q 経) 日本へのビザを取るのが大変厳しいとの話を聞いているが、実際のところは？

A 大) 例えば大学の身分証とか、はっきりと身分を証明出来るものがあれば査証の審査に時間がかかることはないが、やはりインドの場合貧富の差が大きく、審査をきちんとしなければならないというのも事実である。

Q 経) インドの産業政策として、モディ首相は雇用の確保と貿易赤字の是正を目的として製造業の強化を進めているが、製造業の強化とは海外企業の誘致によるものなのか、または国内企業を強化していくものなのか、その方向性をご教授願いたい。

A 大) 海外企業の誘致なのか、国内企業の強化なのか、というところ若干腰が定まっていないうように見えている。国内の財閥系は保護したいし、中国の存在もあるしといったところ。言えることは、インドのマーケットを意識し、現地の会社をパートナーとして製造業の強化をやっていくことだと考える。

Q 友) 沖縄には OIST というすばらしい大学がある。OIST 発のスタートアップなども色々出てきているところ。この OIST に優秀なインド人材を呼び込むには？

A 大) インドのトップの人材というのはそれこそハーバード大学にいてグーグルなどに就職するといふところがあるわけだが、アメリカも学生ビザが下りにくくなっているなど課題もある。トップの人材ではないにしても優秀な人材がインドには沢山いて、例えば昨年ジャパン大学セミナーみたいなものやって、東大や京大などがブースを出して、そこにインド工科大学の学生が来て留学のプロモーションなどを行っている。

Q 経) 今後インドは富裕層の割合が拡大していくと聞いている。観光面で沖縄がインドの富裕層を取り込むには、彼らに刺さる沖縄の魅力を発信していく必要がある。有吉次席公使におかれては沖縄のことも熟知しておられるということだが、この富裕層に刺さる沖縄の魅力とは。

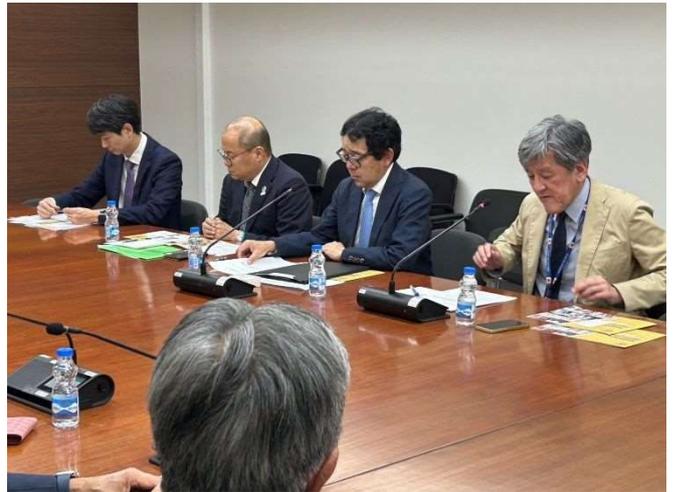
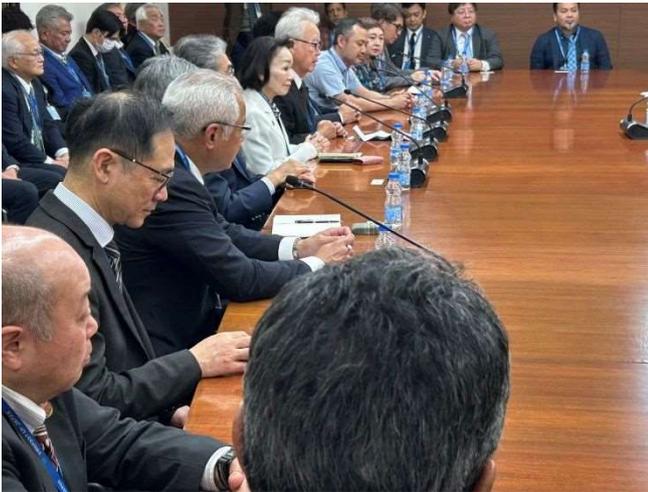
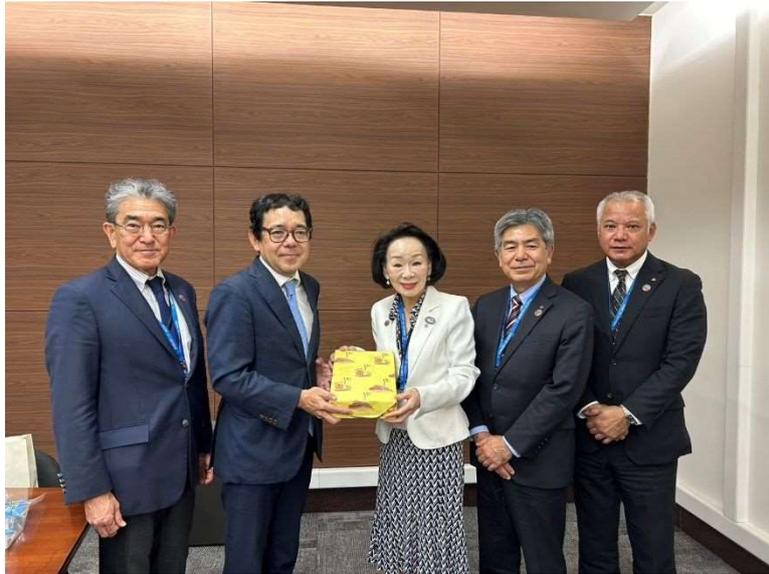
A 大) 富裕層は同じビーチリゾートでもゆったり出来るデスティネーションを選ぶ。また、他の地域にはないもの、例えば以前に岩手に行って温泉や食べ物など、岩手でしか経験出来ないものを堪能して良かったという意見も聞いたことがある。

A 大) やはり長期滞在+ビーチではないか。海外では石垣の海が綺麗との評判を周りからもよく聞く。また、インドでは企業がそれこそ 300 人規模で旅行をすることもあるので受け入れ態勢がとれるかも重要と考える。中にはインド料理を指定することもあるが、前述の規模で対応出来るか。また、富裕層といっても家族・親戚などコックやメイドも含めて 20~30 人規模で海外旅行をすることも多い。ホテルの厨房を貸し切りたいといった要望もある。どこまで対応するか？出来るか？といった課題もある。

Q 経) 日本ではオーバーツーリズムが問題となっている地域も多々あるが、インドではそういったことはあるのか。

A 大) インドではオーバーツーリズムの問題があるとすればタージマハルくらいだと思うが、政府としては観光客をより分散させたい、そのための道路整備などを進めているところ。

以上



VIII. インド日本商工会との夕食交流会

【報告者：仲宗根 斉（沖電企業株式会社 代表取締役社長）】

デリー3日目の夕食には、「インド日本商工会」の会員である下記4名の方をお招きし、意見交換を行った。

【インド日本商工会 参加者】

氏名	所属先・役職
木村 玲 氏	インド三菱重工 代表取締役社長
竹井 亮人 氏	日本航空 インド支店長
渡邊 彰三 氏	JERA エナジーインディア CEO
宮本 宝哉 氏	インド日本商工会 事務局

最初に、宮本様から、インド日本商工会の概要を説明して頂き、その後各テーブルでお招きした4名の方を囲んでの夕食交流会が始まった。

宮本様の説明では、インド日本商工会設立以前から、デリーおよびデリー近郊に拠点を持つ日本企業が任意に集まっていたが、2004年にその数が100社を超えたこと、また今後も増えることを見据えて、2005年より法人化の手続きが進められ2006年7月17日にデリー準州政府より登録が許可され、法人化された。2006年8月24日に開催された設立総会時点の会員数は約130社であったが、2025年1月現在で568社となり創立時から4倍強の会員数となっているとのこと。現在、日本からも入会可能になっているとのこと。



同会設立の趣意として、①会員共通の利益となる諸活動の実施、②会員相互の情報交換および親睦、③日印間の商工業の発展及び親睦交流の促進の3点を掲げ、同会には部会が「貿易部会」「輸送機器部会」など13部会、委員会は「ビジネス環境改善委員会」「半導体委員会」など9委員会、そして8つの分科会もあり活発に活動しているとのことであった。

多数の部会、委員会があるようだが、活動の中心は会員が事業上抱えている諸課題の解決のため、インド政府の関係省庁へ提案を行うこと、また在インド日本国大使館の協力を得ながら課題解決を進めるなど、いかにしてインド国内で事業をスムーズに進めていけるかに注力しているように感じた。特にインド標準規格局(BIS)の認証制度に苦慮している感があり、日本製品をインド国内で販売する場合にはBISによる認証を取得する必要がある。近年その対象品目が増加傾向で「ボルト・ネジ類」なども含まれ、対象品目を使用している企業に

は迅速な対応が求められているとのことであった。ちなみに、事務局は宮本さんを含め5名で対応しているとのこと。

また今回、夕食の席を共にした JERA の渡邊さんとの話からインドの実情を垣間見た気がした。会話の中で、一つ目に、ルールはしっかりとあるがその運用が対応する人で変わることも多く、また同じ人が前日はダメとしていたものが今日は大丈夫になるなど対応に苦慮することもあるとのこと。また、ルールが変わったことで調整しようとしたら「俺は知らない」と一蹴されることもあったそうだ。そのような経験は今回の入国審査時にも実際にあった。検査官によって、入国カードの連絡先電話番号がホテルでOKであったり、個人の携帯番号に書き直せとの指示があったりしたことを思い出した。二つ目に、交通事情である。インドにも教習所はあるようだが、日本であれば教習所で習ったことを意識して運転するし、警察による交通違反の取り締まりも厳しいが、当地ではそのような雰囲気は感じられない。絶えずクラクションが鳴り響き、スペースがあればどんどんと割り込んでくるといった具合で、最初はストレスであったが3日も滞在すればそれにも慣れた。当地でのクラクションは自分の存在を知らせるためのものらしく、トラックやバスなどの後方には「クラクションを鳴らせ」との文字があるらしい。渡邊さんも運転手へセーフティドライブを指導したいがそれでは前に進まないため、車内では寝ている?そうである。

最後に、個人的な雑感として、世界一の人口、優秀な人材の多さ、平均年齢の低さなど、今後のインドに発展の可能性を感じつつも、デリーの街中で見かける人たちの貧富の格差の大きさには一抹の不安も感じた。



IX. NURA（ニューラ）視察

【報告者：鈴木 康友（株式会社ジーセットメディカル 代表取締役社長）】



2月19日より22日まで沖縄経済同友会のインド視察に同行し、視察最終日に訪問した富士フィルムがインドを中心に事業展開している医療検診センター事業施設 NURA(ニューラ)について報告する。

今回は、ニューデリー近郊のグルグラムにある施設を訪問し、前半に富士フィルム現地法人の代表である和田様より事業概要についてご説明いただき、その後施設内を見学させていただいた。



1. 設立背景と今後の展望

NURA は、海外支社にいる日本人の駐在員が健康診断を受けるために日本に帰国して受診している状況を見た現地スタッフから、自分たちも健康診断を受けてみたいという声を受けたのがきっかけとなり事業がスタートすることとなった。現在、インド国内に5ヶ所、モンゴルに2ヶ所、ベトナムに1ヶ所で稼働しており、これからマレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、さらには中東・中央アジアなどにも展開予定。2030年までには、世界に富士フィルムの NURA 健診センターを100カ所設営する目標を立てているとのことだ。

2. 検診センターの特徴ならびに概要について

NURA の特徴としては、下記 5 つが挙げられるとのことだ。

- ①おもてなしの精神を取り入れる
- ②建物の内装はホテルのように綺麗
- ③癌や生活習慣病がメインの検診項目
- ④自社商品を活用した検診サービス提供
- ⑤検診全体の所要時間は 2 時間以内

上記の背景として、インドの病院は、受付後にほったらかされたり、院内の衛生環境も決して良いとは言いがたく、多くの人でごった返しており、逆に病院に行くことで病気をもらってしまうようなイメージがある。一方、NURA は健康な方が予防のために受診する施設なので、①②に挙げたようなコンセプトとしており、また、インドでは癌や糖尿病といった生活習慣病が死に直結するので、そういった項目を集中して見つけるような検診項目としている。さらに、富士フィルムは医療機器やその裏側で繋ぐための IT 機器を自社開発しており、自社商品を活用することでよりスムーズな検診業務が可能になり、その結果として検診全体の所要時間 2 時間以内の中で検診結果もその日のうちに受診者に渡すことができている。

なお、検査手法は概ね日本と同じだが、肺、内臓、心臓周りなどの検査を CT で行うのと乳がん検査や肺がんの予兆診断などに AI を取り入れているのも特徴。また、内臓脂肪を画像で視える化する診断もしており、数値で見せるだけよりもダイエットの意識付けに非常に役立っている。

検診料は 20,000 ルピー（日本円で約 38,000 円）であり、この価格設定はインドの富裕層の中間層くらいをターゲットとして捉えているとのこと。日本人を含む外国人の受診者の割合に関しては今のところ 5%以下で、やはりインドに駐在している日系企業の日本人がほとんどだということ。内視鏡については、インドではまだ認知度が低くあまり需要がないとのことだが、オーダーがある場合には特別枠で検査ができるようになっている。また、注目すべき点として、最近ブータン国の人々がインドに買い物に来るついでに受診するケースが多くなっているとのこと。このことから、医療ツーリズムとしての可能性も秘めていることがわかった。



3. 今回の視察を通じての所感

今回感じた事は、富士フィルムと言う会社は戦前の写真フィルムやカメラ製造から始まり、X線フィルムを通じて医療分野へ進出し、デジタル X 線画像診断装置を開発して医療のデジタル化を率先して牽引してきた。その後も事業の多角化を進め、特に医療分野では東芝の経営危機により売りに出された X 線装置の大手東芝メディカルをキャノンとの争奪戦で破れはしたが、諦めずにその後もう一方の雄である日立製作所の医療部門の日立メディコを買収して、総合的な検診システムを自社で行える陣容になった経緯がある。そして、これを元に企画された今回の NURA 検診センターの事業展開は、東南アジア及び東アジアの医療機器拡販にも貢献し、なおかつ予防医学ビジネスとしても将来期待されるどころ大であると感じた。また、フィルム分野では俗に言う世界最大のコダックとの特許戦争やコピー機ではゼロックスとの買収争奪戦にも勝ち、尚且つヘルスケアから医薬品製造まで経営の多角化を進めている富士フィルムからいま目が離せなくなってきた。

以上

